カミュ全集 2

異邦人・シーシュポスの神話

カミュ全集　2

編集／佐藤朔・高畠正明

新潮社版

AC カミュ全集 2

Œuvres Complètes d'Albert Camus, Tome II

Original Copyright : ÉDITIONS GALLIMARD
This book is published in Japan by arrangements with Gallimard through the Bureau des Copyrights Français.

印刷 1972年10月1日　発行 1972年10月5日
発行者　佐藤亮一
翻訳者　入沢康夫　清水徹　中村光夫　宮崎嶺雄
装幀者　高松次郎
発行所　株式会社 新潮社　〒162 東京都新宿区矢来町71
電話東京(03)260-1111(大代)　振替東京808
印刷所　二光印刷株式会社
製本所　神田加藤製本所
定価850円

〈乱丁・落丁本はおとりかえいたします〉 Printed in Japan 1972

《目次》

異邦人……中村光夫訳 5
シーシュポスの神話……清水　徹訳 77
〔文芸評論、その他小品〕
モーリス・バレスと《後継者》論争……清水　徹訳 211
ジャン・ジロドゥー、あるいは演劇におけるビザンチウム……清水　徹訳 215
麻屑の火のような……清水　徹訳 221
フランシス・ポンジュの『加担』についての手紙……入沢康夫訳 223
選ばれた者の肖像……入沢康夫訳 230
理知と断頭台……清水　徹訳 237
無意味について……清水　徹訳 245
ピエール・ボンネルへの手紙……清水　徹訳 250
ペストのなかの追放者たち……宮崎嶺夫訳 253
解題 262

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

カミュ全集 2

異

邦

人

＊テクストにはN・R・F社の初刊本を用い、プレイヤッド版を参照しました。訳注は初刊本とプレイヤッド版の主要な異同を示します。削除とあるときは、該当括弧内の文章がプレイヤッド版では削られている、等です。（訳者）

第一部

1

今日、ママが死んだ。それとも昨日か、僕は知らない。養老院から電報がきた。《ハハウエシス」ソウシキアス」チヨウイ　ヲ　ヒヨウス》これでは何もわからない。たぶん昨日なのだろう。

養老院はアルジェから八十キロのマランゴにある。二時のバスに乗れば、午後のうちにつく。そうすれば、お通夜もでき、明日の晩帰れるだろう。社長に二日間の休暇を要求した。こんな理由がある以上彼は拒絶できない。しかし不満そうな様子だった。僕は彼に《僕のせいじゃないんです》とさえ言った。彼は返事しなかった。僕はこういうことを彼に言うべきではなかったと思った。大体、僕があやまることはない。むしろ彼こそ僕におくやみを述べるべきだ。しかし彼はきっと明後日、僕が喪に服しているのを見たとき、そうするだろう。いまのところママはまだちょっと死んでいないようなものだ。埋葬がすめば、今度はそれが片づいた事件になり、すべてはもっと公的な外観を呈するだろう。

僕は二時のバスに乗った。ひどく暑かった。いつものとおり、セレストの料理店で食事した。みな大変僕を気の毒がってくれ、セレストは《母親はひとりしかいない》と言った。帰るとき、彼らは戸口までついてきた。僕は少しあわてていた。エムマニュエルの部屋へ登って黒ネクタイと腕章をかりなければならなかったから。数カ月前に、彼は叔父を喪っていた。

僕は発車におくれないように走った。たぶん急いで駆けたのが原因で、それに車の動揺、ガソリンの匂い、道路の照りかえしなども手伝って、僕はうたたねしてしまった。目的地につくまで僕はほとんど眠っていた。そして眼が醒めると、軍人にもたれかかっていた。彼は僕に微笑んで、遠くからきたのかと訊いた。僕はあとで喋らなくてすむように《ええ》と言った。

養老院は村から二キロはなれていた。僕は歩いて行った。ママにすぐ会いたかった。しかし門番は院長に面会しなければならないと言った。彼が忙しかったので、僕はしばらく待った。その間じゅう門番が話しかけてきたが、やがて

院長に会った。彼は院長室に僕を迎えた。小柄な老人で、レジョン・ドヌールの略綬をつけていた。彼は薄色の眼で僕をみつめた。それから僕の手を握って、あまり長いことそのままにしているので、どうひっこめたらよいかわからなかった。彼は書類に目を通して、こう言った。《ムルソオ夫人は三年前にここへはいられましたね。あなたがただひとりの扶養者だった》僕は彼が何か非難していると思って、弁明しはじめた。しかし彼は遮った。《弁解なさることはありません、まだお若いんだから。お母様にかんする書類は読みました。あなたには充分な扶養ができなかった。看護婦をつける必要があったし、あなたの給料は少額だ。結局のところ、ここに居られたほうが幸せでしたでしょう》僕は言った。《そうです、院長様》彼はつけ加えた。《ご存知のように、同じ年輩の人たちのお友達もできました。時代におくれた趣味でも、そういう方々とは一致しますから。あなたみたいに若いと、一緒にいてお母様は退屈なさったでしょう》

そのとおりだった。家にいたとき、ママはいつも黙って僕のすることを眼で追うだけであった。養老院でもはじめのうちはよく泣いた。だがそれは習慣の問題だった。数カ月して、もし養老院から引きとったら、泣いただろう。やはり習慣の問題である。僕が今年になってからほとんどここへ足をむけなくなったのは、いくぶんそのせいだった。それにまたせっかくの日曜日をつぶしてしまうからでもあった。——バスの乗り場に行き、切符を買い、二時間もゆられる骨折りは別としても。

院長はまだ話しつづけた。しかし僕はもうほとんど聞いていなかった。やがて彼は言った。《きっとお母様にお会いになりたいでしょうな》僕が何も言わずに立上ると、彼は先に立って戸口にむかった。階段の途中で彼は釈明した。《ちょっと霊安室にお移ししておきました。ほかの人たちを刺激するといけませんから。院内でどなたかが亡くなられるたびに、ほかの方たちが二、三日神経を立てます。そうしますと、お世話するのがむずかしくなりまして》僕らは中庭を横切った。そこにはたくさんの老人たちが小さな群れにわかれてお喋りしていた。僕らが通ると彼らは口をとじる。そして僕らのうしろで会話がまた始まる。まるでおうむの群れが小声でうるさく喋っているようだった。小さな建物の戸口で、院長は僕からはなれた。《ここで失礼します。ムルソオさん。いつでもご用の節は事務室に居りますから。原則として、葬式は朝の十時にきめてあります。そうすれば、あなたが故人のお通夜なさることもできると

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

考えまして。おわりにひとことおことわりしておきます。お母様はどうも近しい方々に、宗教によるお葬式をしてほしいとよくおっしゃっていたご様子です。わたくしが責任をもってそうとりはからっておきました。ただあなたにはそのことをお知らせしておこうと思いまして》僕は彼に感謝した。ママは、無神論者ではなかったが、生前は宗教について考えたことは一度もなかった。

僕ははいった。非常に明るい広間で、石灰で白く塗られ、ガラス天井でおおわれていた。椅子とX字型の台がいくつかそなえつけてあった。その台が二つ、中央におかれて、蓋をした棺をのせていた。ただ何本かの新しいねじ釘が、ほとんどさしこまれないまま、胡桃酒色に塗った板の上に光っていた。柩のそばには白い上張りをきて派手な色のネッカチーフをかぶったアラビア人の看護婦がひとりうずくまっていた。

このとき、門番が僕のうしろからはいってきた。彼は走ってきたらしかった。少し吃りながら言った。《蓋をしてしまいましたが、お棺のねじ釘をはずしましょうか。お顔をごらんになれるように》彼が棺にちかよったので、僕はとめた。《おいやなんですか》と彼は言った。僕は《ええ》と答えた。彼はやめた。こんなことを言うべきではなかったと感じて、僕は当惑した。しばらくして彼は僕の顔を見つめて、《なぜですか》ときいた。しかし咎めるのでなく、不審をただす調子だった。《知りません》と僕はいった。すると白い口髭をひねりながら、彼は僕のほうを見ずに《わかります》と強く言った。彼は淡青色の美しい眼を持ち、少し赤味がかった肌の色をしていた。彼は僕に椅子をすすめ、自分も僕の少しうしろに坐った。看護婦は立上って出口のほうにむかった。そのとき、門番が僕に言った。《下痢なんですよ、あの女》何のことかわからなかったので、看護婦の顔をみると、彼女は眼の下から顔のまわりに包帯をまいていた。鼻の頭でも包帯は平らになっていた。顔で眼につくのは包帯の白さだけだった。

彼女が行ってしまうと、門番は口を切った。《あなたひとりにしてあげましょう》僕がどんな身振りをしたのか知らないが、彼は出て行かないで、僕のうしろに立っていた。背中に人の気配がするのは窮屈だった。部屋には午後の終りの美しい光が溢れていた。二匹の雀蜂がガラス屋根にぶつかってうなっていた。そして僕は眠くなってきた。僕は振りかえらずに、門番に話しかけた。《ここにはもうながいんですか？》すぐに彼は答えた。《五年》——まるでずっと僕の問いを待ちうけていたようだった。

それから彼は大いに喋った。マランゴの養老院の門番として終るだろうなどと、もし以前に人から言われたら、彼はさぞおどろいたろう。彼は六十四歳で、パリっ児だった。このとき僕は彼を遮った。《ああ、あなたはここの人じゃないんですか》それから彼が院長のところへ案内する前に、僕にママの話をしたのを思いだした。大急ぎで埋葬しなくてはならない、平野は暑く、とくにこの地方はひどいからということであった。そのとき彼はパリで暮したことがあり、それが忘れられないと僕に打ちあけた。パリでは死者を三日、ときには四日も家における。ここでは時間がなくて、死んだということが納得ゆかないうちに、柩車のあとをついて走らなければならない。門番の妻はそのときこう言った。《おだまり、この方にそんなお話することないよ》老人は赤くなって、謝った。僕は間にはいって、《いや、いや、決して》と言った。彼の話は正当だし、おもしろいと思われた。

狭い霊安室で、彼は困窮者として養老院にはいったことを僕に打ちあけた。自分はまだ役に立つと思ったので、この門番の地位を志願したのであった。僕は彼が結局は、在院者のひとりだと注意してやった。彼はそうではないと言った。彼より年上でない者もかなりいる在院者たちについて、彼が《あいつら》《ほかのやつら》またときには《老いぼれども》などという言いかたが、前から僕の注意をひいた。しかし勿論同じことではない。彼は門番なのであり、ある範囲内では、彼らに権力を持っていた。

このとき看護婦がはいってきた。急に夕闇がおりてきた。みるまにガラス屋根の上には夜が濃くなった。門番がスイッチをひねると、光がとつぜん撥ねかえってきて、眼がくらんだ。彼は食堂へ行って夕食しようとすすめてくれた。しかし僕は空腹を感じなかった。すると彼はミルク・コーヒーを一杯もってこようと言った。ミルク・コーヒーは大好きだったから、ええと答えると、しばらくして盆を持ってもどってきた。僕は飲んだ。煙草がすいたくなった。しかしママの前でそうしてよいかどうか分らなかったので、躊躇した。考えてみると、まったくどうでもよいことだった。僕は煙草を門番にすすめて、ふたりで喫った。

そのうち、彼がこう言った。《ご存じでしょうけど、お母様のお友達の方々もお通夜にこられます。それがしきたりです。椅子とブラック・コーヒーを持ってこなきゃなりません》僕は電燈をひとつ消すわけにゆかないかと彼にたずねた。白い壁の上の、光のきらめきは僕を疲れさせた。彼はそれは不可能だと言った。とりつけがそうできていて、

すべてか無であった。僕はもう彼に大して注意を払わなかった。彼はでたり、はいったりして、椅子を並べた。そのひとつの上に、コーヒー沸かしを真ん中にして、茶碗を重ねた。それから彼はママの向う側に、僕と向いあって坐った。看護婦は奥のほうで、背を向けていた。彼女のしていることは僕には見えなかった。しかし両腕の動きでは、どうやら編物しているらしかった。気持のよい晩だった。コーヒーで身体が暖まり、開けた戸口から夜と花の匂いがはいってきた。僕は少しうとうとしたようだった。

ものの擦れ合う音で覚めた。眼をつぶっていたせいで、部屋は白いまぶしさを増したように思われた。僕の前に、影はひとつもなく、どの物体も、角も、すべての曲線も、眼を傷つける明確さで描きだされていた。ママの友人たちがはいってきたのは、このときだった。みなで十人ばかり、黙ってこの眼がくらむ光のなかに滑りこんできた。彼らはどの椅子もきしませずに、腰をおろした。僕はいままでこんなに人を見たことはないほど、注視して、彼らの顔と衣服の細かな点を、何ひとつ見逃さなかった。それなのに、何も音がきこえないので、彼らの現実性を信じにくかった。女たちはほとんどみな前掛をしていて、胴をしめつける紐(ひも)が、とび出た腹をいっそう目だたせていた。老婆がどれほど太鼓腹になれるものか、僕はまだかつて注意したことがなかった。男たちはほとんどみなひどく痩せて、杖を持っていた。彼らの顔で打たれたのは、眼を見られないことであった。そこには、ただ皺(しわ)の巣の真ん中に、鈍い光があるだけだった。彼らはすわると、大部分が僕の顔を見ながら、歯のない口にすっかり食われた唇をして、ぎごちなく首をふっていた。それが挨拶(あいさつ)なのかそれとも筋肉のけいれんなのか、僕にはわからなかった。どっちかというと挨拶したのだと思う。そのとき、僕は彼らがみな僕のまむかいに、門番をかこんで坐り、うなずいているのに気づいた。彼らがそこにいるのは、僕を裁くためだという、滑稽(こっけい)な印象を、僕は一瞬間持った。

すぐに、女のひとりが泣きだした。彼女は二列目なので、仲間のひとりの陰にさえぎられて、僕にはよく見えなかった。小声で、規則正しく、決して泣き止むことはなさそうに思われた。ほかの者は、聞えないような様子をしていた。ぐったり、陰気に、だまっていた。棺や自分らの杖や、あるいは何でも構わず見つめて、ほかには眼をやらなかった。女はたえず泣きつづけた。それが知らない女なので、僕はひどく驚いた。もう聞きたくないのにと思った。しかし女にそう言う勇気はなかった。門番が彼女のほうに身体をか

たむけて、話しかけたが、彼女は首をふって何か早口でつぶやくと、また同じように規則正しく泣きつづけた。門番はそこで僕のわきにきて、そばに腰かけた。かなり長いことたってから、彼は僕のほうを見ずに、こう教えてくれた。《あの女はあなたのお母様とごく仲よしでした。ここでたったひとりの友達だったのに、もう自分には誰もいなくなったと言ってるんです》

僕らは長いことこうしていた。女の溜息と啜り泣きはだんだん間遠になった。彼女はさかんに鼻をならしていたが、そのうちやっと黙った。僕はもうねむくなかったが、疲れて腰がずきずきした。いまではこの連中の沈黙が僕には苦痛であった。ただときどき妙な物音が聞えてなんだかわからなかった。時がたってから、やっと老人たちの幾人かが頬の内側を吸ってこの奇妙な舌打ちに似た音をもらすのだと推察した。彼らはあまり自分らの考えに没頭しているので、それに気付かなかった。僕は彼らの真ん中に横たわっているこの死人が、彼らの眼にはなんの意味も持たないのだという印象さえうけた。しかしいまではそれは誤った印象だったと思う。

僕らは門番の用意してくれたコーヒーを飲んだ。それからあとはもうわからない。夜はすぎてしまった。ただ思いだすのは、ふと眼をあけると、老人たちがめいめい身体を二つに折りまげて眠っているなかで、ただひとりだけが、ステッキを握りしめた両手の甲に頤をのせて、まるで僕が眼をさますのだけを待ちうけているように、じっとこっちを見つめていた。それからまた僕は眠った。腰のいたみがだんだんひどくなるので眼がさめた。ガラス屋根の上が白んできた。まもなく、老人のひとりが眼をさまして、ひどく咳きこんだ。彼は大きな、格子縞のハンケチに痰をはいた。ひとつひとつ、咽喉からもぎとるように。彼が他の人たちをおこしてしまったので、門番はみなに部屋を出るほうがよかろうと言った。彼らは立上った。この苦しい通夜のおかげで、灰のような顔色をしていた。出て行くとき、まったく意外なことに、彼らはみな僕と握手した。——まるで互いに一語もかわさなかったこの一夜がわれわれの親しみをましたかのように。

僕は疲れていた。門番が自分の住居につれて行ってくれたので、簡単な身じまいができた。またミルク・コーヒーをのんだが、とてもうまかった。外にでると、すっかり日が昇っていた。マランゴと海をへだてる丘陵の上の空は一面に赤かった。丘の上を越える風は塩の匂いをここまで運んできた。晴れた日が始まろうとしていた。ながいこと僕

は田舎へ行ったことがなかったので、ママのことさえなかったら、どんな楽しい散歩ができるだろうという気がした。

しかし僕は中庭の、すずかけの木の下で待った。さわやかな土の匂いを吸いこみ、もう睡気を感じなかった。僕は会社の同僚たちのことを考えた。この時刻に、彼らは出勤のために床をはなれる。僕にはそれがいつも一番骨の折れる時刻だった。こういうことをまだ少し考えたが、建物のなかで鳴っている鐘に気をとられてしまった。窓のうしろが引越しのように騒がしかったが、やがてひっそりした。太陽がもう少し空に昇って、僕の足を温めはじめた。門番が中庭を横切ってきて、院長が僕を呼んでいるといった。彼は僕に幾通かの書類に署名させた。みると彼は縞ズボンに黒服をきていた。彼は電話機を手にとって、僕にたずねた。《葬儀屋がさっきから来ております。棺をしめにきてもらおうと思います。その前にお母様にお会いになりますか。これが最後ですから》僕はいいえと言った。彼は声をひそめて電話に命令した。《フィジャック、連中にもう行ってよいと言いなさい》

それから彼は葬式に参列するといったので、僕はお礼を言った。彼は机のうしろに坐って、短い脚をくんだ。ことわっておくが、僕と彼とそれに当番の看護婦だけになろうと言った。原則として、在院者は葬式に参列できない。ただお通夜だけは許可する。《これは人情の問題ですから》と彼は説明した。しかし今度の場合はママの老友《トマ・ペレ》に、葬列にしたがうことを許可した。ここで院長は微笑した。《おわかりでしょう。ちょっと子供っぽい感情です。しかし彼とお母様はほとんどいつも一緒でした。院のなかで、みながからかって、ペレに〈あれはあなたの許婚だ〉と言うと、彼は笑っていました。そう言われるのが二人とも嬉しかったのです。実際、ムルソオ夫人の死は彼にひどくこたえています。私には許可を与えないほうがいいとは思えないのです。しかし往診にくる医師の勧告にもとづいて、彼に昨晩のお通夜は禁じました》と彼は言った。

僕らはかなり長いこと黙っていた。院長は立上って、事務室の窓から眺めた。しばらくして彼はこう言った。《おやもうマランゴの司祭がきてる。時間より早いな》村の中心にある教会に行くには、歩いてすくなくも四十五分かかるだろうと、彼はあらかじめ僕に注意した。僕らは下におりた。建物の前に、司祭と二人の合唱隊の子供がいた。なかのひとりが香炉を持ち、司祭は銀鎖の長さを調節するために、かがんでいた。僕らがくると、司祭は身体をおこした。彼は僕を《わが息子》とよんで、なにか言った。彼が

家にはいったので、僕も彼につづいた。

棺の釘がしめられ、部屋に四人の黒服の男がいるのを、僕は一目で見てとった。車が道で待っていると院長が僕に言うのと、司祭が祈禱をはじめるのが、同時に聞えた。この瞬間から、すべてがひどく速やかに進行した。男たちが布を手にして棺にむかって進む。司祭、そのお伴、院長、そして僕自身も外にでる。門のまえに僕の知らない婦人がいた。《ムルソオさん》と院長が言った。この婦人の名は聞えなかった。ただ彼女が看護婦の代表であることだけわかった。微笑ひとつせずに骨ばった長い顔でお辞儀した。それから僕らはならんで、死体をさきに通した。人足たちのあとについて、養老院をでた。門の前に車がいた。塗りたてで、長方形にぴかぴかして、筆入れを思わせた。そのそばにおかしな服を着た小男の世話人と、身振りのぎごちない老人がいた。僕はペレ氏であることを悟った。彼は天蓋が円く、縁のひろいソフト帽に（棺が門を通りすぎるとき、彼はそれを脱いだ）、ズボンが靴の上でコルクの栓抜きのようによじれている服を着、ワイシャツの大きな白襟に比べて小さすぎる黒布のネクタイをしていた。唇は面皰がいくつもできた鼻の下で慄えていた。細いきれいな白髪の間からつきだしている、無格好にたるんだ奇妙な耳の、血のような赤色が、蒼白な顔との対比で、僕を驚かせた。世話人が僕らの場所をきめた。司祭が先頭に歩み、それから車、そのまわりに四人の男、うしろに、院長と僕自身、そして行列のしめくくりに看護婦の代表とペレ氏。

空はもう太陽にみちていた。それは地面に圧力を加えだし、暑さは急激に増した。僕らが行進を始める前に、なぜかなり長いこと待ったのか、わからない。黒服をきて僕は暑かった。小柄な老人はさっきかぶった帽子をまた改めて脱いだ。僕がいくぶん彼のほうを向いて、眺めていると、院長が彼の話をしかけてきた。母とペレ氏はしばしば、夕方、看護婦につきそわれて、村まで散歩に行ったということだった。僕はあたりの野原を眺めた。空に近い丘に連なる糸杉、この褐色と緑の土面、ここらに散らばった形のいい家などを通して、僕はママを理解した。このあたりの夕暮は憂鬱な休戦のようなものに違いない。今日は、溢れる太陽が風景を戦慄させ、非人間的な、気を滅入らすものにしていた。

僕らは歩きだした。このときはじめて、僕はペレが軽くびっこをひくのに気付いた。車が少しずつ速力をだすと、老人はおくれがちになった。車をかこんでいた男のひとりもやはり追いこされて、いまでは僕と並んで歩いた。僕は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com